



第2話
空知森林管理署
北空知支署
川上 貴

5月1日、元号が「平成」から「令和」に変わりました。今回の改元では、出典である万葉集にも注目が集まり、本屋さんでは在庫がなくなるなどブームが起きました。

「令和」の語源となったのは、万葉集の序文である「初春の令月にして、気淑（うるわ）く風和（やわ）らぐ」の部分です。ちなみにこの後の部分では歌会の主催である大伴旅人（おおとものたびひと）が梅の木を前に『さあ短歌を詠もうではないか』と宣言する場面につながります。



同じ梅を見ていたのでしょうか

いにしえの人は「木」というものに何を感じ、照らしていたのでしょうか。万葉集をのぞいてみましょう。

まずは、梅の歌。梅をもち一フにした歌は約120あり

り、萩に次いで多いそうです。令和の語源となった梅花の歌三二首から。

春されば まづ咲くやどの梅の花 独り見つつや 春日暮らさむ（山上憶良）

春が来ればまずは梅が咲く、梅が春の使者という認識を持っていました。また、平安時代より以前は花といえば梅を指しており、それだけ親しまれていたことが分かります。

続いては、桜の歌。数は梅と比べると約40と少なくなっていますが、梅同様古くから親しまれている花です。

あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらばいと恋ひめやも（山部赤人）



桜には気持ちも重ね合わせます

山の桜が咲き続けていた桜のことを恋しいとは思

わないだろう。（だから短く咲くのが恋しい）という逆説的な歌です。

このように桜はその短い開花期間を惜しむ歌が多いのも特徴です。北海道だと梅と桜と・・・と全部一緒に咲いてしまつので、なかなか実感がわかない部分もありますが、昔の人は花ごとに気持ちを変えながら観賞していたことが分かります。

最後は、北海道を代表する針葉樹であるマツ。残念ながら万葉集で詠まれているマツは北海道でよく見られるトドマツ・アカエゾマツではなく、アカマツ・クロマツを指しているようです。（もちろん二つのマツも道内にはあります。）

マツという言葉には木の「松」と人を「待つ」という二つの意味をかけて詠んだ歌が数多くあります。

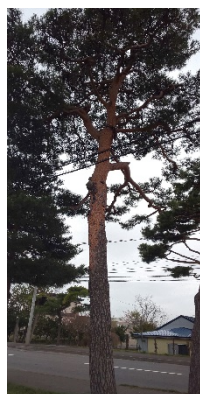


トドマツ

初めて現場の仕事に出て、古代の人が感じたような想いを木に触れる中で共有できればと思います。

その中から一首。
わが屋戸の 君松の樹に
降る雪の 行きにはゆかじ
待ちには待つたむ
（作者不詳）

庭の松の上に雪が降っている。迎えには行かず、ひたすら来るのを待つとしましように、という恋慕った歌です。この他にも数多くの樹種が万葉集では詠まれています。



アカマツ

スマートフォンやカメラが発達した現代とは違い、自分が見た情景や感じた想いを映像に残す方法がない時代。短歌という方法で自らの想いを残そうとしていました。